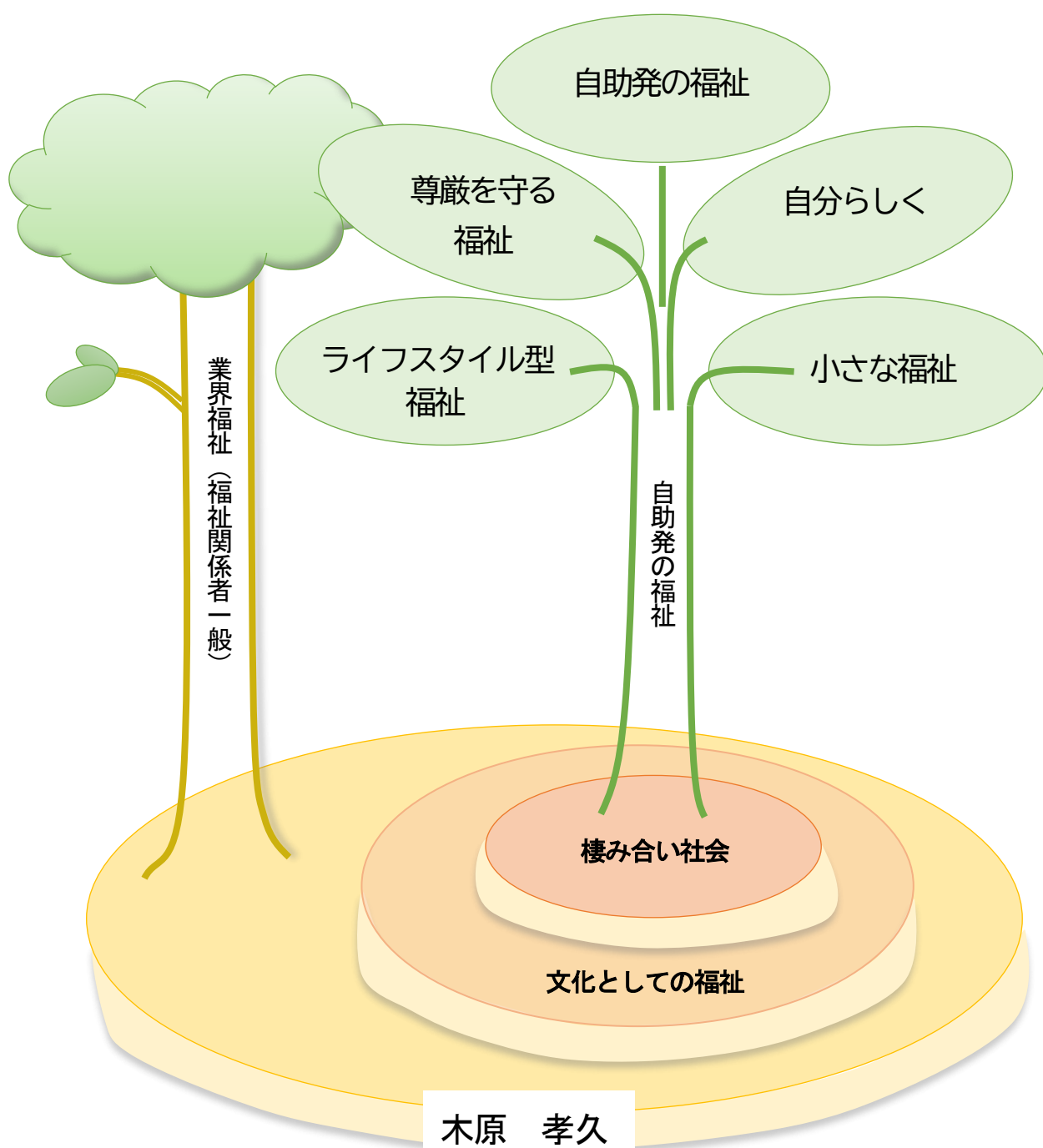


自助発の福祉



《1》「自助発」とは何か？

(1) 業界型は担い手から発し、自助型は当事者から発する

今の福祉のあり方は、ざっくり言えば「業界型福祉」。福祉業界に属しておらず、一般住民として福祉を実践している人たちもいるが、彼らもまた業界型の福祉パターンに倣っている。福祉はそういうものだと思っているのだ。

業界型の場合、まず福祉を実践しようという人(担い手)が、福祉とは何かを定義し、それに該当する課題を決める。そして、それに対応したサービスを作り出し、そのサービスを求める人を募集し、特定の場を集めて、サービスを提供する。

しかし自助発の場合は、特定の課題を抱えた本人がその課題を意識することから始まる。その問題をどのように解決するかを考え、自力で解決できない分については、周りに支援を求める。そのために当事者としてやるべきことはする。

(2) 福祉は担い手と受け手の共同作業と捉える

本書で言う自助発は、従来の当事者発とは本質的に異なっている。その特徴を整理するところなる。

一般に福祉活動と言えば、担い手の活動を指す。しかし当事者の側からしたら、助けてもらうためにいろいろ努力することもまた立派な福祉活動ではないかと考えるのだ。そこから発展して、要するに福祉というのは、担い手と受け手の共同作業だと結論するのである。

このように考えると、これまで全く目を向けられてこなかった、当事者側のさまざまな努力に光が当たるようになる。それらもまた福祉の営みとするならば、私たちが思っているよりもはるかに多くの福祉活動が、日々おこなわれていることになるのだ。

①自助＝自力＋他力。

②担い手＝福祉の担い手。受け手＝福祉の担い手。

③福祉＝担い手＋受け手

①自助とは周りの支援を得ながら問題を解決すること

自助というのは、「自力だけで問題を解決すること」ではなく、「自力で解決できないときは他人の力も借りて、問題を解決すること」。この「他力」を初めから自助に盛り込んでいるのが本書の考え方の特徴だ。私たちは「助けられ上手」という言葉を使っているが、自助力を持っているということは、自力だけで何とかできることではなく、むしろ他人の力を上手に活用しながら自分の問題を解決できる人のことを言う。

②受け手のしていることも立派な福祉活動

福祉という営みを、担い手だけのことではなく、受け手を含めたものにする。受け手が担い手を確保するためにいろいろ努力することも立派な福祉活動だと考える。

③福祉という営みは、担い手と受け手の共同作業

だから福祉という営みは、担い手だけが頑張るのではなく、担い手と受け手の共同作業なのだ。

改めてそういう目で福祉の営みを見直してみると、確かに、福祉の担い手は文字通りの担い手だけだと考えるのは単純すぎる。担い手の周りで、様々な「らしき」ことをしている人たちを全て、切り捨ててしまっているのだ。

担い手にニーズのヒントを提供する人、取り組みの手伝いをする人、その活動の評価をしてあげる人。また、受け手の周りにも、「あの人に頼んでみなさいよ」とアドバイスする人や、「私が代わりにやってあげる」と言う人もいるかもしれない。地域

の福祉活動というのは、実際には、担い手と受け手の周囲にいる様々な人たちの支援によって効果ある活動になっているのだ。

そうすると、福祉が担い手と受け手の共同活動と言うのも、単純すぎる構図であるが、当面はこの構図をもとに新しい自助型福祉をつくっていったらどうか。

④当事者が自助の枠を乗り越えて、互助、共助、公助にまで踏み入っていくプロセスに注目

福祉が担い手と受け手の共同作業であるということは、主役はそのいずれかでなく、あくまで両者ということになる。とは言っても、それ以前に当事者の内から福祉問題が生じ、それを本人が意識し、どうやって解決しようかと考えるのが、福祉という営みの出発点なのである。

当事者は問題解決のために、自助エリアを構築し、不足資源を調達するために、互助や共助の活動に踏み込んでいく。また各種サービスを受けながら、そこでも当事者としての役割を果たしていく。市民の福祉活動にも参加しながら、そこでも当事者なりの役割を果たしていく。

そうやって、福祉はますます深みを増し、豊かになっていく。公的サービスに対しても、同じように当事者の側からそれに参画し、豊かな福祉をつくっていくために貢献する。

⑤当事者が本来の役割を果たすことで福祉がどのように豊かになるか

こうして当事者は、自助から出発して、互助、共助、公助のいずれにも加わっていくことで、福祉を発展させていく。

当事者のこうした活動によって、福祉の全般が、今までよりもはるかに豊かなものになっていく。今は当事者がほとんどそれらの役を果たしていないために、ただ一定のサービスを提供する福祉になっている。

だから、自助発というのは、当事者が主体になって福祉を進めるのだという、主役

意識を強く打ち出した発想ではなく、自助が本来の役割を行使していくことで、福祉がどのように豊かになり、深さを増すかに関心を集中させているのだ。

《2》自助発を構成する 5 つの発想

表紙のイラストにある 5 つのキーワードが、自助発の福祉の基本構造である。

この 5 つのキーワードがなぜ重要なのか。これを説明するにはどうしても、現代社会の病理に触れなければならない。

(1)福祉を文明(の営み)にしてはいけなかった

①文明の利器で人々の福祉に貢献した部分とその反対の部分

今は文明社会である。文明と聞くと、浮かんでくるのは、便利ということだろう。その恩恵を被っていることを意識しなくなっているが、確かに便利で有り難い社会である。遠くへ行くにも車や電車、飛行機でわずかな時間で行くことができる。コロナの時代にも、自宅にいながら買い物をしたり会議に参加したりできる。コンピューターで、世界のあらゆる情報が手に入る。便利もそろそろ極限まで来ているという感じもする。

それはそれでいいのだが、その文明に病理と言われる局面があることも否定できない。文明の利器は、詐欺などの犯罪にも巧妙に利用されて莫大な被害を生み、私たちは便利な生活を享受する一方で、自宅にいながらお金や重要な情報を盗まれるリスクを負っている。

原子力という技術を生かして、「きれいな発電」ができたという一方で、いったん事故が起きれば、何十年間も人が住めない地域をつくってしまう。

文明の利器で人々の福祉に貢献した部分とその反対の部分、社会のあらゆる部

面から探し出して貸借対照表にのせてみたら、さてどうなるか。

1つの重要な問題は、文明が人々の心に深く浸透した結果、文明によって様々な被害が人間に生じていても、それをあえて軽く見ようという力が働いていることだ。原発の被害が過少に評価されているのも、そのせいだろう。

②文明が、福祉に対してどのような功罪を果たしているか

私たちの関心の対象は、この文明が、福祉に対してどのような功罪を果たしているかということである。福祉とは、要援護の当事者を救済することだろう。文明はこれにどういう関わりをし、どういう成果を上げているのか。

文明の恩恵によって、物事は効率的に行われる。その「物事」が、単に文字通りのモノを作ったり、それをどこかへ運んだり、別のものに改良したりすることだけならば、確かに便利である。

しかし「物事」の中身が、人の救済ということになると、話は変わってくる。

私たちは福祉の営みをするときにも、便利の法則を活用しているのだ。効率がいい、手っ取り早い、即効性がある、面倒ではない、やりやすい、シンプルである、など。

そこで考え出された方法は、まず担い手と受け手をきれいに区分けする。推進者は担い手の側に立って、やり易い方法を考える。そして対象者を障害の種類などで分けて、まとめて、各施設に入所させたり、どこかに集めて一律のサービスを提供するといったものだ。

これを物流業者が使うのなら、ぴったりはまるだろう。しかし相手が人間だったらどうか。驚くべきことに私たちはこの方法を人間にもそのまま使っているのだ。しかもさらに驚くべきことに、このやり方が非人間的であるなどとは夢にも考えていないということである。

今は子ども食堂が流行しているが、例えばあなたがこの活動をしようという時、どのように考えるだろうか。とりあえず場所はどこにするか、食材はどうやって調

達するか、仲間はどうか集めるか、対象者はどうやって集めるか、かかる費用はどうか、
って調達するか。やっぱり物流業者の考え方と同じではないか。

③集めない、まとめない、一律のサービスもだめ

もっと別の発想はないものか。まず足元で食に不便をしている人がどこにいるのか、
どのように不便をしているのか、それをどう解決したいと彼らは考えているのか、
そして実際に彼らはそれぞれどのような行動に出ているのか。それらを個々に見て
いって、では自分たちにできるサポートは何だろうか考える。

もしこういうふうな考えを進めていけば、私たちのやり方は根本的に変わって
くるはずである。まず「集める」のではなく、1人ひとりの食事ニーズや、解決したい
方法、その人自身が持っている資源などを総合的に勘案して、1人ひとりに合った
支援法を考えるということになる。

従って、まずは本人が問題解決の行動を開始する。まさに自助である。その自助の
活動をどのようにサポートしてもらいたいのかも当事者本人が考え、支援者に提示
する。

文明的福祉から反文明的福祉に変えていくには、まず基本的に、福祉の営みに文
明を持ち込まないことである。実際にはこれが至難の業だろう。私たちは何を
するにも文明的手法を導入するようになってしまっている。

(2)自助発＝当事者が自分の福祉をプロデュース

そこで私たちがとり得る方法、人間的な福祉のやり方を新たにつくっていくこと
になる。

まずは、当事者が自分の福祉を主体的に考え、実践していくこと。それだけで
なく、それを実行するときに、周りの人たちを上手に活用していく。自分の福祉を
プロデュースするということだ。この腕を身につけた人ならば、これで一定の水
準まで

進んでいける。自助である。

そこから発展して、自ら互助や共助の活動にも加わって、それに貢献しつつ、自分に必要な資源をそこで調達してしまう。ただの自助というより、連帯型自助と叫ぶたらどうか。

(3)小さな福祉＝当事者にはご近所があれば足りる

この自助活動を推進するために、どういう条件が具備される必要があるか。まず、今の福祉の圏域の設定を改める必要がある。

現在、地域は一般的に3つの圏域に分けられていて、第1層の市町村圏域が数万世帯。次いで第2層が校区圏域で、これが数千世帯。そして第3層の自治区が数百世帯規模。今の福祉は担い手主導で行われているため、大抵は第1層に拠点を置き、ここでニーズを推測し、サービスをつくって提供している。

しかし、当事者の多くはそこまで行けない。当事者はどこにいるかという点、この3つの層にはいない。その次の第4層にいるのだ。私は「ご近所」と言っている。50世帯程度だ。ここに世話焼きさんもいて、足元の要援護者のお世話をしている。

要援護の当事者はここが生活圏になっているので、彼らにとっては、極端に言えば、ご近所があればそれで事足りてしまうくらいである。そして、その上の自治区あたりでいろいろな活動が行われていけば、当事者はそれに参加しつつ、自分用の資源をいただければいい。

要するに、「小さな福祉」をつくることこそが、当事者が求めていることなのだ。大きな福祉は、第1層から「サービスが必要な人はこちらへ」と呼びかけているだけで、当事者には手の届きにくい、おおざっぱな福祉である。

(4)ライフスタイル福祉＝当事者のやり方と合致

次いで、文明的な福祉活動法から、反文明的な活動法に改める必要がある。文明的な手法は既に紹介したが、反文明的な手法はその反対だ。単純でわかりやすく、対象者をまとめて効率的に行われる福祉ではなく、たとえば、福祉という営みを社会の表面には出さない福祉だ。

要援護の人が、自分に必要な資源を探し、足元でぴったりの資源を見つけ、上手に活用する。個々に当事者と資源が出会い、ドッキングする。そこで個々に福祉の営みが始まる。表面上は福祉らしきことは何もなされていない。福祉は社会の中に隠されている。人々の生活の中に福祉が紛れ込んでいる。文明の手法と違い、ライフスタイル(生き方・生き様)としての福祉である。

自助のやり方は、これにそっくりだ。ライフスタイル的な福祉行為が、自助の福祉行為と合致しているのである。こういう福祉のあり方を地域に広げていく。

(5)尊厳を守る＝文明的手法を反転させる

文明的な福祉のやり方が支配している間は、福祉の目標として、「尊厳」を守るといった表現は出てこない。元々、福祉関連の法律にはすべてこの言葉が入っていた。しかし文明的な手法が大勢になっている今は、効率よく福祉を実行することが重視されるため、個々の当事者の尊厳を守ろうなどとは言っていられなくなった。

しかしこれからどういう福祉を作っていくべきかということをもじめに考えるなら、真っ先にこの言葉を持ち出さねばならない。それは取りも直さず、文明的な手法はやめるということである。そして、担い手主導で作られている今の福祉を、当事者主導に反転させなければならない。これを今の活動者が納得するだろうかと言えば、確かに難しい。しかしこれをやらねば尊厳の保持は実現しないのだ。

(6)棲み合い＝面倒だけど絆は強まる社会を作る

そして最後は、「棲み合い社会」づくり。今はその反対の、棲み分け社会である。サロンは元気な人たちの集まり。老人クラブも元気な高齢者だけの集まり。

それだけではない。文明の影響はこういう所にも行き渡っていて、心地よくないものは自分の世界から排除する、という気風が身につけてしまっている。我が家の近くに老人ホームができるのはけしからん。保育園もけしからん。

不快なものはすべて排除するとなると、ご近所づきあいは不快の極致になる。いろんな事情や性格の人がいて付き合いが面倒だし、何かもらったりすればお返しも面倒だ。要援護者は、地域のサロンではなく、福祉施設に行ってもらいたい。面倒な人、迷惑な人も、地域からいなくなってほしい。

そうやってできるのは、福祉の対象者をすべて排除した、“健全な人”の集まり。これを極限にまで突き詰めていけば、自分1人の社会になってしまう。

福祉の社会というのは、その反対に、どんな面倒な人も暖かく受け入れる、迷惑な人がいても容認する、いろいろな気質の人たちが狭い空間にひしめいているのを、おおらかに見る、そういう社会なのだ。絆とは、そうした面倒な人間関係の中で生まれてくるのだ。

となると、棲み合い社会をつくるということは、今までとは全く反対の社会をつくるということになる。文明が「心地よさの追究」を煽っている間に、その反対の「面倒だけど、絆は強まる、助け合いも始まる」社会をつくる意欲が、今のところ全く失われている。しかし諦めるわけにはいかない。

当事者が自助を進めていく時に必要なのは、助け合い社会ができていることである。当事者はどうしたって、誰かに助けてもらいながら生きていかねばならないが、助け合い社会ができていれば、その中で楽しく生きていくことができる。その助け合い社会は、今述べたような、面倒だけど絆は強い社会のことなのだ。

(7)4枚の葉は、「ご近所」をつくれと言っている

こういう構図を持った新しい福祉がめざしているのは、突き詰めれば、「ご近所福祉」なのである。ご近所とは互助圏域、50世帯の小さな範囲だ。表紙の4枚の葉は、結局のところ、ご近所福祉をつくりなさいと言っているのだ。言い換えれば、ご近所福祉が広がっていけば、新しい福祉が実現している証拠と言える。

①当事者は自分の足元に理想の福祉をつくってもらいたいと願っている

自助発を実践する当事者は、要援護状態ゆえに、足元の圏域で生きるより仕方がない。そうすると、理想の福祉は、互助エリア（50世帯のご近所）で実現してほしいと願っている。ここでなら、必要な資源も確保しやすいし、自分もまたここでは資源にもなりうる。ここが福祉の地域になれば、要援護でも豊かに生きられるのだ。

②ご近所なら当事者も助け合いの主導権を取れるから尊厳も守れる

尊厳を守ることができるのは、当事者が主導権を握れる場合である。ご近所ならそれが可能だ。支え合いマップを作ると、ご近所圏域では、当事者は積極的に支援者を見つけようとしているのがわかる。

ここでは福祉資源も見えるし、自分が役に立つ相手も見える。それらをうまく生かせば、助け合いを主導することができる。担い手の言いなりになる必要はない。

③ご近所こそ、ライフスタイル型福祉の理想形が展開されている

ご近所で行われている福祉こそ、理想的なライフスタイル型の助け合いなのだ。ここでは活動は水面下で行われているし、双方向で、一対一の関係が成り立っている。しかも社会的な営みというよりは、私的な関係の中で福祉が行われている。

④小さな福祉は、最後はご近所福祉に行き着く

小さな福祉とは、当事者の立場から、なるべく本人のいる場所に近いところに福祉ネットをつくろうというものだ。とすれば、小さな福祉は限りなくご近所福祉に近づくことになる。

⑤ご近所で棲み合いができれば、ほぼ理想に近い

ご近所で棲み合いができるかが、現代社会の最難題と言える。しかし当事者がご近所で生きていくには、これが実現しなければ困るのだ。少なくとも、ご近所では当事者が積極的に助けを求め、またそうしなければ生きていけない。そうした当事者の助けられ攻勢が、棲み合いを可能にする可能性もある。

住民福祉総合研究所

木原孝久

〒350-0451

埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷 1 4 7 6 - 1

TEL.049-294-8284

kiharas@msh.biglobe.ne.jp

<http://juminryu.web.fc2.com/>
